Michael Cox

力んでもいない、緩みすぎてもいない……

「歌うように吹く」を感覚だけで終わらせないために

BBC交響楽団首席フルート奏者

マイケル・コックス

ロンドンの王立音大に留学、最下位のクラスへ……

取材・構成：**秋山君彦**（フルート奏者）　撮影：岡崎正人　記事協賛：株式会社 グローバル

「オーケストラの中からとてつもない音が聞こえてくる」と日本のプロの間でかねてから話題を呼んでいたのが、この人。ベルエポック時代の巨匠を彷彿させるその風貌も個性的な英国屈指の名手に聞く。

ロンドン響、ロンドン・モーツァルトプレイヤーズ、ブリテン・シンフォニカの首席を歴任し、現在はBBC響、アカデミー室内管、ロンドン・シンフォニエッタの首席として活躍する。ソリストとしても、ジョン・タヴナーの「アルトフルート、メゾソプラノと管弦楽団のための作品」をロイヤル・アルバートホールで世界初演、フィンランドの作曲家ロッタ・ヴェンナコスキのフルート協奏曲を英国初演、サイモン・ホルトのピッコロ協奏曲を世界初演、ピアノのマレイ・ペライアと共にブランデンブルグ協奏曲のコンサートツアーとレコーディングを行うなど活躍している。王立ロイヤルアカデミー音楽院教授。門下からはアダム・ウォーカー（ロンドン響首席）など著名なフルーティストが出ている。

――コックスさんはジンバブエのご出身だそうですね。

コックス　はい。父親が勤めていた食品会社の関係で。当時はまだローデシアという国名が使われていました。

私は本当にアフリカの大自然のなかで伸び伸びと育ったんですよ。10歳で始めたフルートも好き勝手放題というか、野放し状態というか（笑）。

――ロンドンにはいつ？

コックス　15歳の時に単身で乗り込みました。その環境の変化による刺激と、そして恐怖の度合いは、想像して頂ければおわかりになると思います。

きっかけは、ジンバブエにロンドン王立音楽大学のピアノの先生が来訪した折に私の演奏を聴いて下さり、何としてもロンドンに来て勉強するようにと勧めて下さったのです。王立音楽大学はふつうはその歳では入れませんが、留学生ということで大丈夫でした。しかし入れられたのは最下位のクラス。つまり試験の演奏の出来はともかく、フルートのテクニックとしてはすべて自己流のデタラメということが即座に判明したわけですね（笑）。

万有引力に逆らっていないランバルの構え

――王立音楽大学ではどなたに師事されたのですか？

コックス　まず基礎を徹底的にたたき込んでくれたのが、グレアム・メイガー先生。彼は王立音大で当時すでに勤続40年というロンドン最強のコーチ・トレーナーでした。最初の2ヵ月間はなんと頭部管のみで、アンブシュアの修正。その後も間違って覚えた運指を直すやら何やらで1年間辛抱し、おかげで2年目には最上級のクラスに入ることができました。

もう一人はロンドン・シンフォニエッタのセバスチャン・ベル先生で、この方は頭部管を自分で作るほど手先が器用で、リペアマンとしても確かな技術をもつなど、異才を放つ人物です。彼のレッスンはたとえ話が多く、陶磁器の話だったり小説の中身だったりと毎回謎解きをふっかけられているようでした。彼のクラスの生徒たちはそれに困惑することなく、逆に先生に頼らない自主性が芽生えるので、結果的にベル先生は優秀な弟子を多く育てる名教師として有名になっています。ほかに世界的にも知られたスーザン・ミラン先生にも音楽大学時代にレッスンを受けています。

――イギリス以外の国のフルーティストで影響を受けた人はいますか？

コックス　私が音楽大学を卒業するかしないかの頃だったと思いますが、ロンドンでランバルのマスタークラスが行われました。実はフルートを始めたばかりの時にジンバブエにランバルが演奏に来たことがあって、それであの音色に魅了されて以来、ランバルは自分にとってのアイドルだったので、ロンドンで初めて近くで接したときは興奮しましたね。

まず驚いたのが、見事に脱力しきった構え。ランバルのアンブシュアは完全に

アフリカの大草原から単身で

3月14日（水）スペースDoで日本では初めてとなる公開マスタークラスとミニコンサートを行った。コンサートではピアノの石橋尚子さんとバッハのソナタイ長調BWV1032より第2〜3楽章、ファリャの7つのスペイン民謡より「ナナ（子守歌）」、デュティユーのソナチネ他を演奏した。

あれほど心地良さそうにフルートを吹く人は、ランパルしか知りません。

左にずれていて、そのせいかどうか楽器の角度も足部管側が下がって、ずいぶん斜めに見えます。それが万有引力に逆らっていないというか、楽器を保持しているようには見えないというか。うまく言えませんが、とにかくあれほど柔らかく気持ち良さそうにフルートを吹いている人は、ランパルしか知りません。

――ランパルに実際に教えを受けて、ご自分のなかでの変化は？

コックス　音楽を表現する上でも、音を響かせるということにおいても、究極はリラックスだと確信したことですね。

ランパルがなぜあれほど偉大なのかというと、常に音楽の本質をつかみ、核心にふれているからではないでしょうか。ランパルは子どもの頃から家のなかで当時最高といわれた父親ジョセフの生の音を常に聴き、レッスンというより、ダメな部分、やってはいけないことを厳しく父親から指導されました。それによって、どうすれば完璧に近づいていくのか、何が本物なのかというのが、ランパルの身体のなかにしみ込んでいるのだと思います。でなければ、あれほど長い間、世界中の人々から愛され続け、キャリアを保つことはできなかったでしょう。

声楽を習って分かった フルートで陥りやすいワナ

――王立音楽大学卒業後は、すぐにオーケストラに？

コックス　はい。最初がBBC交響楽団の副首席で、そこで4年半くらい。次にロンドン交響楽団に移り、5年ほど。そしてまたBBCに、今度は首席として戻りました。

――日本にも何回もいらしているのですね。

コックス　12回以上は来ていると思いますよ。それぞれのオケで3、4回ずつ。あとはアカデミー室内管弦楽団やロンドン・モーツァルト・プレーヤーズなどでも数回来ていますので。

――古い話ですが、1999年のロンドン・モーツァルト・プレーヤーズの来日公演でシューベルトの交響曲第5番を聴いたとき、東京芸術劇場の最上階の客席までコックスさんの音が素晴らしくよく通っていたのが印象に残っています。

コックス　もしそれが本当だとすると（笑）、私がずっとイメージし続けている、イギリス伝統のスタイルとフランスのソノリテの融合がうまくいっていたのかもしれません。イギリスでは昔から、強くてどちらかというと固めのサウンドが好まれます。それはDNAとしても存在しているだろうし、王立音楽大学でも学ぶのは基本的にそのスタイルでした。私は最初にランパルの洗礼を受けているので、イギリスとフランスをどうしてもブレンドさせたかったのです。これに関してはもちろん私より先に、すでにジェフリー・ギルバートというパイオニアがいましたけれども。

――何か具体的な取り組みはあったのですか？

コックス　たとえば「歌うように吹く」。それを感覚だけで終わらせないために、私は実際に歌を専門的に習いました。するとわかるのはフルートで陥りやすいワナです。つまりフォルティシモで大量の息を消費する、息を吐く直前に力をため込む、フレーズの始めや終わりで息のスピードが不自然に変化する。どれも歌では絶対にやらないことなのです。

私は自分の生徒たちにもよく歌わせますが、その場合、アーティキュレーションを除きます。声楽でも器楽でも、基本というか神髄はレガートだと思っていますので。そして歌っているときに自分の身体がどういう状態になっているか、よく観察させます。一番の目的は、力んでもいない、緩みすぎてもいない一番居心地の良いバランスを見つけること。イギリスのレッスンの現場で「もっと支えて！」というのは、最も頻繁に聞かれるフレーズですが、それをまともに受け取れば力む一方になってしまうのはわかりきっています。この絶妙のバランス感覚を会得することこそが「支え」であり、大ホールで音が通ること、そしてイギリスとフランスのスタイルの調和にもつながっていくと思います。

――コックスさんはバランスとしてではなく、身体のなかで支えを感じる場所はあるのですか？

コックス　強いて言うなら下腹部。男性ならベルトの位置ですね。口の周辺も含め、上半身はまず意識しません。もっと突き詰めると、本当は身体の内側から出てくるエネルギーのようなものなんです。私の生徒が最近、日本の古武術を習い始めたんですが、彼が道場で教わることは、私が常日頃レッスンで言っていることとまったく同じらしいです。

実際に歌を専門的に習ってみて分かるのは、フルートで陥りやすいワナ。

アルタスALを吹いて故郷に戻ったような安心感が……

――楽器についてうかがいます。今、お使いのアルタスのモデルは？

コックス　ALのシルバーH管です。以前はルイ・ロットを吹いていて、その時は6年間ほどオープンGisでした。今はまたクローズに戻しています。

――以前、ロンドン交響楽団のギャレス・デイヴィスさんにインタビューした時、ALモデルの魅力として、自分とコックスさんというかなりタイプの違う二人をともに受け止めてくれるキャパシティの広さ、ということを語っておられました。

コックス　ギャレスの言うことはよくわかります。私はずっとロットを吹いていて、もうそれがルーツのようなものなので、ALを吹いた時の第一印象として、まず故郷に戻ったような安心感がありました。そしてそのテンションのまま、自由度はロットよりはるかに高いので、「これはまるで絵の具箱のようだ！」と。

――管厚はヘビーだそうですが。

コックス　ええ。ロットが薄い管なので、ALも最初はライトを試しましたが、なぜかヘビーの方がロットの抵抗感、ひっかかり具合に近いので。楽器の重量は当然重くなりますが、身体も慣れているので妨げにはなりません。フルートという楽器は好きになればなるほど、逆にその制限のある表現力にいらだったり、ヴァイオリンやチェロへの羨望が強くなったりすることがありますが、このALにしてからそういう感情が起こらなくなったというのが、一番の幸せですね。

――ALのピッチは？

コックス　BBC響に合わせて440です。オケ全体でピッチに関して問題にな

ヒゲを伸ばしたきっかけは「チャリティ・チャレンジ」（何かに挑戦して達成したら寄付行為を行う）だったという。達成後も剃らずに現在に至っているとか。

Michael Cox

ることはありませんが、弦と管との間のかすかな軋轢はどこにでもあるでしょう。どちらが高い、低いということではなく、弦のように指先でチョイとピッチを修正できる人たちには、管楽器ではそれが身体にどれだけ負担がかかるかまったくわからないみたい（笑）。

低音域は丁寧に練習する必要がある

――さきほどのデイヴィスさんは、ご自身のロンドン交響楽団のパワフルなサウンドについて話されていましたが、コックスさんがいらっしゃるBBC響のカラーは？

コックス　ロンドン響の音圧は、私もいたのでよく知っています（笑）。どちらもレパートリーの広いオケですが、BBC響の場合はさらに、常に新曲をやっているので、柔軟性はこちらの方が一枚上手かな（笑）。とにかくどんな現代曲でも、仕上がりはおそろしく早いです。

　ところでフルートセクションには私の生徒だった向井知香さんがいますが、彼女の低音域が最近すごく良くなってきた。聞いてみると、横で私のリラックスした状態を見ているうちに、だんだんと変化してきたそうです。これは自慢でもなんでもなく、私がランパルから学んだことが受け継がれているということでしょう。

――やはり低音はそういうことが如実にあらわれる音域なんですね。

コックス　そう、難しいと思います。歌う時のように顎のポジションも適切でなければいけないし、息のスピードもちょっとでも速くなると響かなくなるので、息をもっていかれそうになったら逆に引き戻すくらいのテンションをかけなければいけません。低音というのはパイプオルガンやマリンバを見ればよくわかりますが、高音に比べてそれぞれの音の差が激しいので、隣り合った音の変化を身体でよく感じながら、一つずつ丁寧にトレーニングする必要があります。

――コックスさんは日課練習やウォーミング・アップなどはどのように？

コックス　申し訳ありませんが、これについては私はまったく模範的ではなく、決まったパターンももっていません。正直に言うと、していない（笑）。なぜならBBC響で次から次へと来る新しい曲の譜読みが、私にとっては十分な日課練習になっていますので。

　それと、ここが大事なところなんですが、練習する時には技術的な面と音楽的な面を確実に分けて考えること。同時にやろうとすると効率が悪く、仕上がりも音楽的な表現に制約があるものになりやすい。きっちりと分けて練習するのを徹底していれば、そのうちにどのタイミングで双方を結びつけたらよいかというのが、自然とわかってくるはずです。

――ところで、イギリスのフルーティストは変わった人が多いそうですが、なかでもコックスさんはベネットさんとともに巷では「ロンドンの2大奇人」と呼ばれているとか。

コックス　何それ？　知らない。いずれにせよ、かのウィップと肩を並べられるのは光栄ですね（笑）。以前はデヴォンというロンドンの郊外から往復4時間半も電車に乗って通っていたとか、いろいろと思い当たるふしはないわけではありませんが、やはりこの風貌のせいかな（笑）。

――そのコックスさんのおヒゲなのですが、もしかしてモイーズ以前のパリの錚々たる歴代のフルーティストたちを意識されたのでは？

コックス　いや、単なる偶然ですよ。とにかく我がエルガーも含めて、偉大な先人たちと外見だけでも同列に並んだ以上、これからは心しておかなければなりますまい（笑）。

――ヒゲの話ばかりで恐縮ですが、それほど立派にたくわえられていますと、息の流れや抵抗に影響があるのでは？

コックス　まったく問題ありません、大丈夫、ご心配なく。ただ本当にたまになんですが、ヒゲのカールした部分がリッププレートとチューブの間の狭い隙間に引っかかり、楽器を離した時に身体ごともっていかれて、前につんのめりそうになることが……（笑）。

BBC響のフルートセクションは向井知香さんはじめ他のニックスさんお弟子さんたちである。

低音では隣り合った音の変化を身体でよく感じながら丁寧に練習する必要がある。